

名古屋の発展を支えた「縁の下の力持ち」(2)

－名古屋市上水道110年の足跡－

■安定した給水サービス ー水源確保と浄水場の新設ー

初期の名古屋の上水道は木曽川の自然流で賄われてきた。戦後の水需要の増加に対応するため木曽川総合用水事業に参画し、岩屋ダムと木曽川大堰の水利権を確保した。その後、長良川河口堰、味噌川ダムにも水利権を確保した。

浄水施設では大治浄水場を1946(昭和21)年に建設して名古屋市西部地域一帯へ給水を開始した。さらに、春日井浄水場を1969年に建設して名古屋市北部地域と東部地域に給水した。

春日井浄水場(写真1)は1972年以降に施設能力の増強が行われ、現在では、名古屋市最大の給水能力(1日あたり59万立方メートル)を持つ浄水場になった。図1に名古屋市の水道に関わる水源、水道施設の全体図を示す。



〔写真1〕 春日井浄水場 提供：名古屋市上下水道局



〔図1〕 水源施設・水道施設位置図 提供：名古屋市上下水道局

■水道施設の耐震化

大規模地震の際に問題となるのは、水・電力・食物の3大インフラの被害である。中でも水道施設の破損は能登半島地震に見られるように復旧に長期間が必要となる。名古屋地区は南海トラフ大地震では最大震度7の揺れが予想され、名古屋市の水道施設は耐震化を強力に進めている。浄水場では自家発電によるポンプ機能の確保、埋設水道管の耐震管への変更である。

名古屋市の水道管耐震化率は2024(令和6)年3月時点で65%と全国の政令指定都市ではトップクラスである。写真2は耐震管の一例で、地震による伸縮方向のズレと曲がっても接続部が外れないような構造になっている。



〔写真2〕 ダクタイル鋳鉄製耐震管
出典：<https://www.kubota.co.jp/product/ironpipe/support/catalogs.html>

(渡辺治男)